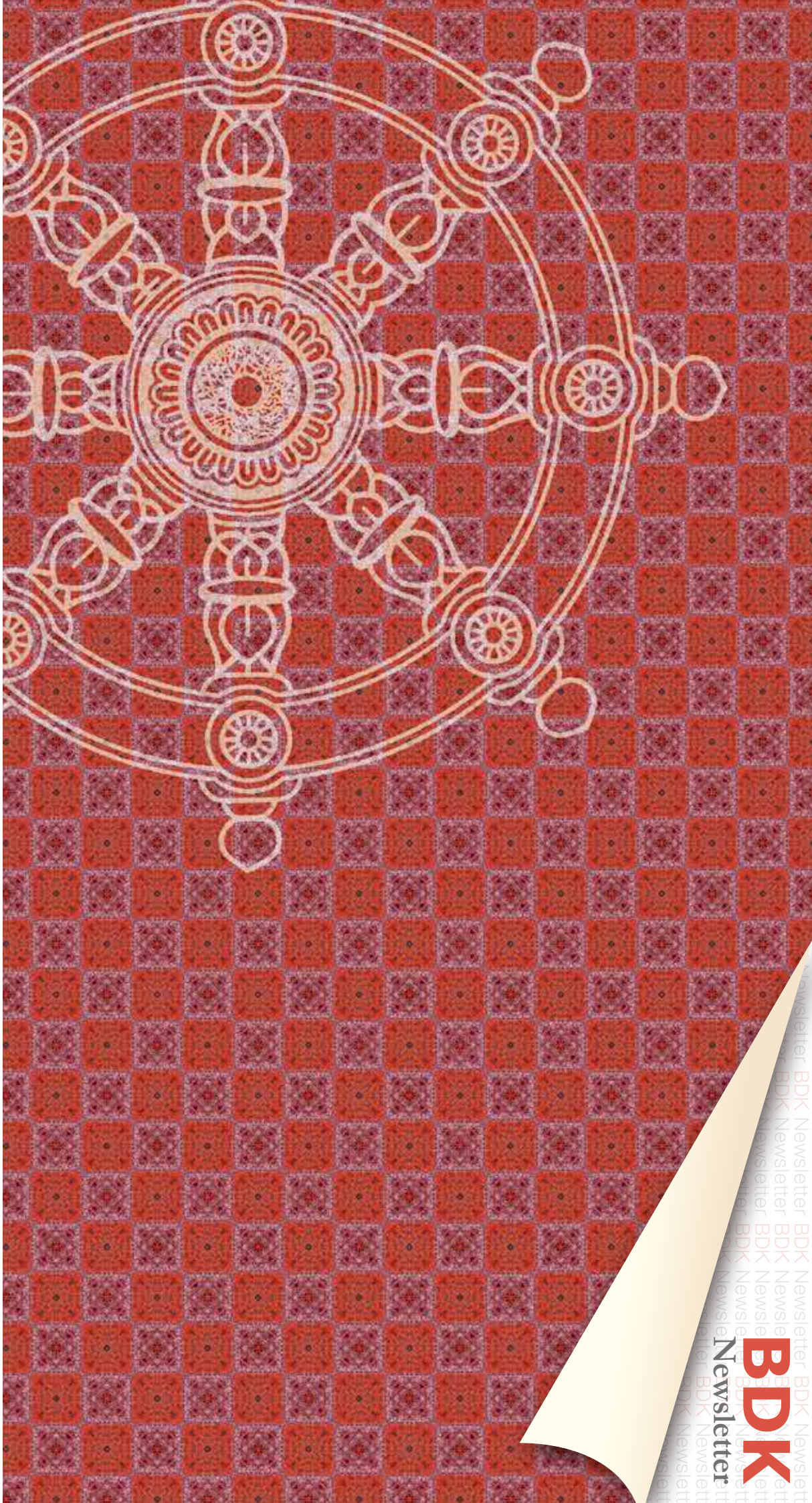
道

みち



公益財団法人 仏教伝道協会

No.03
2014

BDK Newsletter

公益財団法人　仏教伝道協会
会長　沼田 智秀

道 みち

03
CONTENTS

02　**公益財団法人 仏教伝道協会（平成25（2013）年度の主な活動）**

1．出版事業

「仏教聖典」頒布の今（平成25（2013）年度の頒布状況等）

BDK英訳大蔵経、その他新刊書籍のご案内

「仏教聖典」を訪ねて

●インタビュー～大学講座でも活用される「仏教聖典」
京都大学 こころの未来研究センター　特定准教授　熊谷誠慈 師

06　**2．助成・表彰事業**

平成25（2013）年度日本人留学生奨学金受給者紹介

平成25（2013）年度外国人留学生奨学金受給者紹介

●インタビュー 花園大学所属 Osvaldo Mercuriさん、同　芳澤 勝弘 教授

第47回仏教伝道文化賞

ＢＤＫ東日本大震災復興支援～学生ボランティア活動（宮城県気仙沼市）

●ボランティア活動を経て～参加学生による各地での展示会開催報告

平成25（2013）年度　その他助成事業

●全日本仏教青年会主催　国際仏教徒青年交換プログラム（福島県いわき市）

15　**3．啓蒙活動・支援事業・仏教講座の開催**

第43回実践布教研究会（日蓮宗総本山 身延山久遠寺）

第16回仏教音楽祭（浄土真宗本願寺派 築地本願寺）

三田落語会

「仏教聖典」を初歩英語で学ぶ会

「仏教聖典」を経営に活かす会

「仏教聖典」を生活に活かす会

忙しい女性のための坐禅会

●阿純章 師（天台宗 円融寺 住職）を囲んで　：参加者の声をご紹介

BDKシンポジウム～全3回

22　**海外協力機関の活動紹介**

1）北米圏
アメリカ
ハワイ
メキシコ

2）欧州圏
ドイツ

30　**“ささえあって”「感謝」**

公益財団法人 仏教伝道協会
BUKKYO DENDO KYOKAI

慈悲と共生の仏教精神を世界に

仏教伝道協会は、株式会社ミツトヨの創業者沼田惠範が、み仏の教えを広く世界に弘めるために発願し、有縁の方がたのご協力により、昭和40（1965）年に設立されて以来、仏教聖典の現代語訳と外国語訳による編集、刊行とその普及を事業の柱として、多くの皆さまのご賛同、ご協力を賜り、着実にそのあゆみを進めてまいりました。

平成20（2008）年の公益法人制度改革に伴い、内閣府より移行認定を受け、平成25（2013）年4月1日から「公益財団法人仏教伝道協会」と名称を改め、より公益性と信頼性の高い団体として新たに出発致しました。移行に伴い、財団の目的を「日本文化の基本でもある慈悲と共生の仏教精神と仏教文化とその学術振興を促進し現代的理解を弘め、グローバルな啓蒙活動を通して豊かな人間性を育て、よりよい社会を形成する」とし、さらなる活動の場を拡げていきたいと思っております。

「公益財団法人」としての活動も、無事1年目を終えることができ、来年、平成27（2015）年には、当財団も設立50周年の節目を迎えます。これからも特定の宗派にとらわれず、仏教が持つ東洋の叡知を一人でも多く世界の人々に伝えるための活動や事業を展開し、最終的には、民族や国家を超えて、人類の平和と幸福に貢献できることを念頭に、更に活動の充実を図って参りたいと考えております。

今後とも、当財団の活動にご支援、ご協力のほどを、心からお願い申し上げます。

合掌

1 出版事業

Publication

01 Activity 「仏教聖典」平成25（2013）年の頒布状況

仏教伝道協会がこれまで頒布してきた「仏教聖典」は、翻訳言語数46言語、累計発行部数約830万冊以上に及んでいます。

平成25（2013）年は、ホテル・病院への寄贈に加え、平成24（2012）年より開始した国内の仏教系学校・幼稚園等への普及版仏教聖典の寄贈活動に特に力を入れました。入学・卒業の記念品、公開講座、保護者会での頒布品、道徳授業での副読本、留学生への日本語紹介の一助など、幅広く活用していただいています。

学びの場で「仏教聖典」に触れ、釈尊の教えをより身近に感じることによって、より豊かな人間性を育成していただきたいと願っています。

本年は洛南中・高等学校（真言宗）、東大寺学園（華厳宗）、上宮高等学校（浄土宗）、比叡山高等学校（天台宗）、立正大学（日蓮宗）等を始め全318校に747冊寄贈しました。

海外へは海外協力機関の他に、ブータンYeedzin Guest House・Khangkhu Resort（新規）、ネパールThe Dwarika's Resort（補充）等の南アジアのホテル、United Nation Population Fund of Bhutan、バングラデシュのChakma Raj Vhar Pali Examination Centerなどの団体や韓国の曹溪寺（韓国仏教界における最大宗派である大韓仏教曹溪宗の総本山）主催でソウルにて開催された「燃燈祝祭（花まつり）」での配布を含め約8万6千冊を寄贈しています。

〈平成25(2013)年の「仏教聖典」頒布状況〉 1月～12月

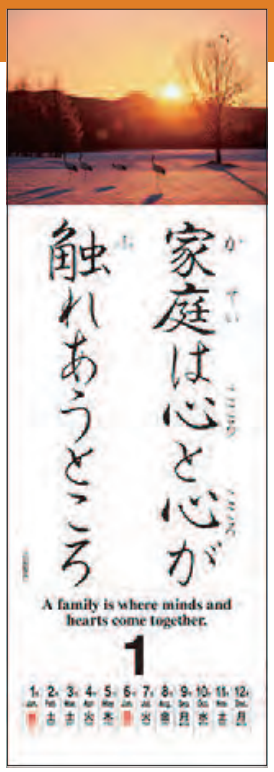
		件　数	寄贈冊数	販売冊数
国内	ホテル(新規)	20	1,760	
	ホテル(補充)	197	15,050	
	病院(新規)	4	28	
	病院(補充)	14	382	
	学校(販売)	16		9,716
	学校(寄贈)	318	75,014	
	寺院(販売)			4,152
	寺院(寄贈)		783	
	一般他販売			961
	書店			1,756
	寄贈		9,266	
	国内頒布数計		102,283	16,585
海外	海外協力機関		80,556	
	ホテル	17	2,009	
	その他	44	3,373	
	海外頒布数計		85,938	0
			188,221	16,585
総　計				204,806

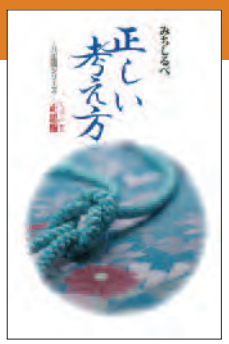
バングラデシュの僧院にて

02 Activity 「英訳大蔵経」デジタル公開と刊行状況

平成25（2013）年は、BDKアメリカと共同で、「天台・法華経論集」「中阿含経(1)」の2冊を刊行しました。また、4月より大正新修大蔵経テキストデータベース(通称：SAT)上の検索機能を利用した英訳大蔵経のデジタルデータ検索が可能となりましたが、これに加えて国内外からの要望に応え、平成26（2014）年2月より仏教伝道協会の公式ウェブサイト上でのPDFデータの公開を開始しました。

こちらのデータ公開により、英語圏の読者が仏教の経典に直接触れていただく機縁となることを願っています。





Activity 03

一日一訓カレンダー・みちしるべ『正思惟』『仏教のひみつ』普及版 発刊

㈱学研とタイアップした学習マンガ『仏教のひみつ』の上製本を、全国5千軒の児童館と2万6千園の保育施設に寄贈しました。また、より多くの方がたにご活用いただくために、普及版の体裁でも刊行、全国の寺院や仏教系保育施設・児童養護施設を中心に、10冊以上を頒布し、大変ご好評をいただいています。

また毎年発刊している「一日一訓カレンダー」には更に改良を加え、紙リング式の留め具を採用し、より使いやすく環境にも配慮しました。その解説書『みちしるべ 正しい考え方―正思惟―』は、武蔵野大学教授山崎龍明師に、31の文言にやさしく心に響くお話をつけていただきました。

〈全国に広がる「仏教聖典」の輪〉 ※小学校以上での採用実績　H25.12末現在

東京	大乗淑徳学園	埼玉	淑徳与野中学校・高等学校
東京	東方学院	千葉	国府台女子学院
東京	淑徳日本語学校	東京	駒込中・高等学校
東京	東京仏教学院	東京	駒沢女子中学・高等学校
三重	高田学苑	東京	芝中学・高等学校
滋賀	叡山学院	東京	淑徳中学校・高等学校
京都	京都文教学園	東京	淑徳小学校
京都	中央仏教学院	東京	淑徳巣鴨中学校・高等学校
宮城	聖和学園短期大学	東京	淑徳SC中等部・高等部
栃木	足利工業大学	東京	世田谷学園中学校・高等学校
栃木	足利短期大学	東京	聖徳学園中学・高等学校
千葉	淑徳大学	東京	千代田女学園中学校・高等学校
東京	桜美林大学	東京	東京立正中学校・高等学校
東京	駒沢女子大学大学院	東京	立正中学校・高等学校
東京	駒沢女子大学	東京	武蔵野女子学院中学校・高等学校
東京	駒沢女子短期大学	東京	安田学園中学校・高等学校
東京	淑徳短期大学	神奈川	鶴見大学付属高校
東京	大正大学	神奈川	藤嶺学園藤沢高等学校
東京	武蔵野大学	山梨	身延山高校
東京	立正大学	富山	高岡龍谷高等学校
山梨	身延山大学	石川	尾山台高等学校
愛知	愛知学院大学	愛知	愛知啓成高等学校
愛知	愛知学院大学短期大学部	愛知	大成高等学校
愛知	愛知文教女子短期大学	愛知	豊川高等学校
愛知	同朋大学	三重	高田中・高等学校
岐阜	岐阜聖徳学園大学	滋賀	比叡山高等学校
岐阜	岐阜聖徳学園大学短期大学部	京都	華頂女子高等学校
三重	高田短期大学	京都	京都女子高等学校
京都	京都大学 こころの未来研究センター	京都	京都西山高等学校
京都	京都光華女子大学	京都	京都文教中学校・高等学校
京都	京都光華女子大学短期大学部	京都	京都文教短期大学付属小学校
京都	京都文教大学	京都	花園中学高等学校
京都	京都文教短期大学	京都	東山中学・高等学校
京都	花園大学	京都	洛南中学・高等学校
京都	龍谷大学	京都	龍谷大学付属平安中・高等学校
京都	龍谷大学短期大学部	大阪	四天王寺高等学校
大阪	四天王寺大学	大阪	四天王寺羽曳丘高等学校・中学校
大阪	四天王寺短期大学部	大阪	四天王寺学園小学校
大阪	相愛大学	兵庫	神戸国際高等学校
兵庫	兵庫大学	兵庫	神戸龍谷高等学校
兵庫	兵庫大学短期大学部	兵庫	須磨ノ浦女子高等学校
岡山	くらしき作陽大学	奈良	東大寺学園中・高等学校
岡山	作陽音楽短期大学	岡山	岡山龍谷高等学校
福岡	筑紫女学園大学	広島	進徳女子高等学校
福岡	筑紫女学園大学短期大学部	広島	崇徳中・高等学校
北海道	双葉高等学校	広島	広島音楽高等学校
宮城	聖和学園高等学校	佐賀	龍谷中学校・高等学校
栃木	足利工業大学附属高等学校	熊本	真和中学・高等学校
栃木	足利短期大学附属高等学校	熊本	鎮西中学・高等学校
群馬	樹徳高等学校		

※この他、平成25(2013)年12月末現在、250校の仏教系保育施設様にご活用いただいています。

特　別　イ　ン　タ　ビ　ュ　ー

「仏教聖典」を訪ねて

京都大学　特定准教授

熊谷 誠慈師 に聞く

「仏教聖典」の頒布を軸に活動の場をひろげてきた仏教伝道協会ですが、多様化する社会のニーズの中で、近年様々な場面で活用されています。本日は、この「仏教聖典」を教育現場にてご活用いただいている京都大学こころの未来研究センター・上廣こころ学部門特定准教授の熊谷誠慈先生にお話を伺いました。

◎聞き手・撮影=公益財団法人 仏教伝道協会　江口 郁
◎場所=京都大学　こころの未来研究センター

Q まずは「仏教聖典」との出会いをお聞かせ下さい。

仏教伝道協会を設立された沼田惠範師が昔、戦後間もない米国のカリフォルニア大学へ留学されて様々なことを経験される中で「仏教」の伝道の在り方というものは宗教者だけのものではないと考えられ、「キリスト教」の聖書がホテルのベッドサイドに置いてあったのを参考にして「仏教聖典」をつくり頒布されました。このように、古い考えを大切にしつつも、良いと思ったものは何でも取り入れるというご姿勢に強い共感を覚えました。ただ、私の個人的な印象として、当時はそのように〝革新的〟であった仏教伝道協会さんの活動も、今や〝伝統的〟な域に入ってきたのかなと感じています。

永年(仏教伝道協会の)存在そのものは存じ上げていましたが、設立されて50年が経とうとする(仏教伝道協会は平成27年に設立50周年を迎える)タイミングで、自分がプライベートで参加している〝フリースタイルな僧侶たち〟(様々な宗派の僧侶たちで構成・運営されているフリーペーパー)で活動を共にする僧侶の友人にあるものを紹介されたのです。それが「仏教聖典」で、これを使って私が担当している各大学の講座で、若い学生さんたち向けに授業をしてみたらおもしろいのでは、また、仏教への興味の浅い学生さんたちも入門的に仏教に触れることができる良いきっかけになるのでは、と思った次第です。

Q では、大学講座にて、実際どのように「仏教聖典」をご活用いただいたのでしょうか?

最近どの大学でも同じ傾向にはあるのですが、ある特定の宗教、宗派のことだけを(布教という観点で)伝えるというのは難しくなりつつあるように思います。こうした状況を考えますと、出来るだけ客観的な目線で知識を伝えるという姿勢が現在の大学の宗教教育において求められているように思います。

そうした事情から、これまで授業ではレジュメ形式やチャート形式などで、システマティックに概説を行ってきました。それに対して「仏教聖典」は読み物ですから、図式的な理解を損ねるのではないかと危惧しておりました。ですが、実際「仏教聖典」をよく見ると時系列的にしっかりしている上に典拠が細かく示してあったので、授業でも安心して使えるなと思いました。「仏教聖典」では、多数の経典引用が、編集者の意図のもとにしっかりと組み直してあるので、安心して使用することができました。

特に使いやすかったのは〝おしえ〟(5章から成る「仏教聖典」内第2番目の項目)の部分でした。仏教学の授業の中では、歴史、思想の二側面から授業を行う構成をとっています。授業の中では、単なる教義概説にとどまらず具体例を提示することによって実感を以て伝えることが出来たらと考えていたところ、この〝おしえ〟の章は、意外と論理的に説明していると同時に堅苦しくなく、実践を念頭におい

ているため、読者にとってはより身近に仏教を感じ取り、実践へと繋げていくことができるように思います。ゴルフと同じですが、少し上達するとグリーンに出てみたくなる、単純な理論を頭の中に入れると実践してみたくなる、そういう心理があるように思います。

Q 実際に「仏教聖典」をご活用いただいた訳ですが、学生たちの反応はいかがでしたでしょうか？又、使用してみたご感想をお聞かせ下さい。

いわゆる体系的な知識に加えて、それぞれの専門用語（キーワード）毎にブッダの生の言葉を届けようという試みだったのですが、複数の学生さんたちから好意的な反応がかえってきました。

ブッダの言葉を聞けたことで、より仏教に対する親近感がわいた、ブッダ像に近づけたことによって仏教に対してもより親しみを持つことが出来た、というような感想を得ました。また別の学生さんは余った時間で、授業では使用しなかった部分も読んでみたと、そして読んでいる内に面白くて全て読み切ってしまったそうなのです。授業でのきっかけがなければ、おそらくこの学生さんは「仏教聖典」の存在すら知らないままだったかもしれません。ただブッダの言葉を伝えようとするのならば、レジメに引用文を載せるだけでも良いのですが、その場合は、その文章のみしか理解することは出来ませんし、当然その前後の文脈はわかりません。また、レジュメのようなコピー資料であれば、ブッダの言葉が書いてあったとしても、ぞんざいに扱ったり、平気でゴミ箱に捨てたりしてしまいます。しかし、〝聖典〟という形で配布することによって、学生さんたちもブッダの言葉をより丁寧に扱うようになりました。しかもこの持ち運びやすいサイズが、荷物の多い学生さんたちでも簡単に持ち運べ楽に取り出せる点でも、大変良かったと思いますし、こちらとしても使用して良かったなと思う点でした。

Q 現在までに、世界各国の教育機関にて活用されている「仏教聖典」ですが、日本の教育現場での今後の活用についてどのようにお考えでしょうか？

特に日本の戦後教育の中では、宗教的な要素を公的な教育現場に持ち込むということは簡単なことではありませんでしたし、現在においても、特に公立の小学校や中学校では難しい状況があります。というのも、出来るだけ中立的な立場で、との考えを常に念頭においているので、特定の宗教や経典だけをもちだすということは容易なことではありません。

ただ、学校現場での教育は1日あたりたったの5～7時間程度ですよね。教育というのは24時間です。挨拶、食事、掃除1つとってもそれは教育ですよね。実際学校にいる時間以外の時間の方が長いわけですから、私個人としては余りそこ（公的な教育現場）だけに固執する必要はないと考えています。むしろ、可能な形で宗教教育が出来れば良いなと考えています。

最近の若い人の宗教に対するイメージはネガティブな場合が多いですよね。特に大学の1年生の学生さんなどに「宗教の印象は？」と聞いてみると、往々にしてネガティブな答えが返ってきますが、それはオウム真理教の影響が強いのではないかと思います。最近の人はその事件自体は知らなくても、文字情報として知っていますし、テロ活動などにイメージが結びついていってしまいます。〝宗教〟に関して正しい知識を身につければ、そのような偏った認識をすることはないわけですから、信仰心とは別の次元で勉強しておくべきだと思うのです。

グローバルな社会を目指していく今後を生きる人たちは、1つの教養として、少なくとも文化的背景としても互いの宗教を知り理解することは非常に大切なことだと考えます。宗教を知らなくてもグローバルな活動は可能ですが、必ずその後ろには人、その後ろには文化、その更に後ろには精神が存在していることを決して忘れてはいけないと思うのです。このような状況もあり、今後の教育現場では、布教とは異なる視点から宗教教育を取り入れていくことがあっても良いと思います。その際には、こちらの「仏教聖典」を活用したいですね。

ただ、教育現場にいるそれぞれの教師たちが、それぞれの場面に即したかたちで使用出来るよう、「仏教聖典」の構成を再度組み直していただくというか、教材のプロと協力しながら、〝教材〟として活用が出来るものを編纂していただけると、より多くの教師が授業の中で活用出来るのではないでしょうか。

＊　＊　＊

「仏教聖典」をご活用いただいている教育機関は、平成25（2013）年だけでも日本全国318校、約7万5千冊を寄贈、様々な場面でご使用いただいています。

熊谷先生も仰っていただいた通り、〝布教ではない宗教教育〟をひろく取り入れることにより、より良い人格形成を促し、グローバルな社会でも偏見なく活躍の出来る学生たちの育成が望まれますが、その一助として「仏教聖典」が今後もお役に立てることを願っています。

2 助成・表彰事業

Support / Commendation

2013年度 BDK Fellowship「日本人留学生奨学金」制度のご紹介

「日本人留学生奨学金制度」は、日本から海外に渡り国際的な視野を養い、将来の仏教学術振興に貢献しうる日本人の若手研究者を育成したいという願いから、平成24（2012）年に設立しました。

第2回目となる平成26（2014）年度は、審査委員会による厳正な審議の結果、下記2名が（五十音順に記載）が選出されました。（※支給内容の詳細、応募方法等につきましては仏教伝道協会公式ウェブサイトをご確認ください）

岸 清香さん

■現在所属機関／筑波大学大学院　一貫制博士課程
人文社会科学研究科　大学院生
■予定所属機関／ライデン大学地域研究研究所
■研　究　内　容／大乗菩薩とは何者か
―大乗経典及び瑜伽行唯識学派の諸論書に対する註釈書群の比較検討―

渡辺 俊和さん

■現在所属機関／オーストリア科学アカデミー
アジア文化・思想史研究所
■予定所属機関／オーストリア科学アカデミー
アジア文化・思想史研究所
■研　究　内　容／インド大乗仏教における論理学思想の受容とその系譜

第1回 受給者感想

▼昨年発足したばかりの「日本人留学生奨学金」制度ですが、早速、第1回奨学生より届いた実際に受給してみての感想をご紹介します。

平成25（2013）年度 第1回奨学生
井内 真帆 氏
Post-Doctoral Associate, Department of South Asian Studies, Harvard University

――当協会の奨学金へ応募されたきっかけは？また受給して良かったこと、受給後の展望についてお聞かせ下さい。

平成24（2012）年に開催されたある国際学会に参加した際、同じく参加者の先生から当奨学金の募集について教えて頂きました。既にそのときには現在の所属先であるハーバード大学に居り、滞在の延長を考えていたところでした。所属先を自由に選べる点と既に海外で研究を行っている場合も応募が可能な点が、わたしの条件にぴったりと当てはまったので、すぐに応募を決めて準備をしました。

応募をしてからその年の年末には結果をいただきましたが、奨学金を受給出来ると決まった時はとても嬉しかったです。引き続き受け入れて下さったハーバード大学のvan der Kuijp教授も結果を聞いて大変喜んでくださいました。

1年間長く同大学に滞在出来たことにより、平成23（2011）年から取り組んでいる新出のチベット語文献『ラディン寺史』Rgyal ba'i dben gnas rwa sgreng gi bshad pa nyi ma'i 'od（13世紀成立）に対する研究の成果を本として出版することになり、現在、その準備を進めています。

Interview

「外国人留学生奨学金制度」のご紹介

「外国人留学生奨学金制度」は、海外から来日し仏教研究をする外国籍の学者、研究者または学生に対して、それぞれが自国に戻り、日本で学んだ仏教精神、文化等を学問を通じ、弘く世界に伝えていただきたいとの願いから平成3（1991）年に設立されました。毎年開催される奨学金審査委員会は平成26（2014）年度までに第24回を数え、のべ60名の素晴らしい人材を採用して参りました。元受給者の多くは現在、世界各国にて仏教学界の第一線で活躍されております。

平成25（2013）年度受給者インタビュー

平成25（2013）年度の採用は3名。今回はそのうちの１名、花園大学国際禅学研究所に在籍中のイタリア人研究員、メルクーリ・オズヴァルド氏とその指導教授である同大学同研究所教授・副所長の芳澤勝弘先生にお話を伺いました。終始和やかに進められたインタビューは、メルクーリ氏と芳澤先生の信頼関係を裏付けるような、温かい雰囲気の中、笑顔の絶えない時間となりました。

◎聞き手・撮影=公益財団法人 仏教伝道協会　江口 郁
◎場所=花園大学　国際禅学研究所

――まずはお二人の出会いは？。

芳澤先生　初めて私がオズヴァルドさんに会ったのは、彼が立命館大学に在籍していてその後本学（花園大学）に入ってきた時でした。色んな研究者の方がたから彼の話は聞いていましたが、当時は私が直接指導していた訳ではありませんでした。言葉をただ読むだけではなくその背景にあるものまでも読み解いていく、そのようなことが出来ないと禅の研究は出来ないと、そういったことを言ったと思います。もちろん立命館大学は素晴らしい大学ですが、この大学（花園大学）に来れば臨済禅を学ぶという点では、資料も豊富ですし、絶対的に良いだろう、というようなことでした。

――BDK Fellowshipへ応募したきっかけは何ですか？また採用が決まったときのお気持ちは？

メルクーリ氏　この花園大学と縁のあった仏教学研究者の方がたに勧めていただき、色々とお話を伺った上で大変良い機会だと思い直ぐに応募を決めました。

決まった時は嬉しさが爆発しましたね。まず採用数が限られていますし、世界中から優秀な研究者が応募してくる上に審査

基準も大変厳しいと聞いていましたので、まず採用は難しいと思っていました。決まったと知った時には大変嬉しかったです。すぐに芳澤先生はじめお世話になっていた先生方に感謝の気持ちを伝えました。

――現在の研究テーマとその内容を教えて下さい。又こちらのテーマを選ばれた理由をお聞かせ下さい。

メルクーリ氏　一般的にいうと私の研究は「鎌倉・室町時代の臨済宗の歴史と思想」なのですが、その中で特に「大燈国師」の名で知られる「宗峰妙超」という昔の僧侶の思想の研究ですね。文献を読んで、そこからいわゆる禅のスタイルを明らかにしようとしています。大燈国師という人物は、日本の臨済宗の歴史の中でとても重要な人物で、今現在日本に生きている臨済宗の僧侶たちは皆、大燈国師から繋がっていると考えられています。応燈*関（おうとうかん）という一柳があって研究する価値があると考えています。しかしながらその研究は未完成というか、まだ始めたばかりで、今現在はその大燈国師を取り上げている研究者は殆どいないと思います。そこで私は既に研究された文献と未研究とされる文献の両方を同時に取り上げて、いわゆる「大燈禅」、大燈国師特有の禅を明らかにしようとしています。

＊おうとうかん／応…大応国師、燈…大燈国師、関…関山慧玄

イタリアに居たときに夢窓国師をテーマとして選んで卒業論文を書いたのですが、夢窓国師を勉強する際に、どうしても同時期に存在していた大燈国師との比較をすることがあり、そこから大燈国師のおもしろさと厳しさ、その鋭い思想に気付いて、その時点でまだまだ大燈国師の研究はさほど進んでいない現状を知ったので、こちらの研究をすべきだと思い直しました。

一見とても無謀に見える大変な研究テーマなのですが、同時に大変面白いテーマでもあります。この研究をしていく上でいくつかの根本的な問題があるのですが、1つは言葉、語彙の問題です。その時代の漢文は日本で独自に発展してきた漢文であり中国の漢文ともまた異なるので、そもそも文章や単語の意味が分からない、つまり基礎の研究が必要です。沢山の同じような例文を集めて同じ単語、同じ表現を集めて、そこから意味を探るという難しくて時間のかかる作業なのですが、それは絶対的に必要ですね。辞書を引いてみても、結局殆どの場合当てはまるものがなく、思想を論じる以前の問題で、まず文章の意味が分からないといけませんから、それを今まさに芳澤先生にご指導いただいて進めているところなのです。

芳澤先生　今彼が行っている研究は、例えるならば、前人未踏の岩山を登るようなものです。先人が登ったルートがあるわけでもない、また、先人の使った良い道具があるのでもない。何の道具もなく登っていかなくてはならないような、大変険しいものです。もし先人の残してくれた素晴らしい道具があったとしても、時には邪魔になることもある。また、そういう装備ばかりを余り気にすると、重さで落っこちてしまうかもしれないのです。つまり、常に偏見なく身軽な状態で進んでいかなくてはいけないということですが、これらは1つの方法論の例えです。ある意味では〝禅的〟な方法なのですが、道具も含めて、徹底的に自分の頭で考えながら進めていくということです。未踏のルートを切り開きながら、そのための道具も同時に作っていかなくてはいけない。道具が出来るのを待っていたのではいつまで経っても始まらない、そういう状況です。

彼が行っている研究は前人未踏の岩山を登るようなもの

もちろん、参考にすべき先行研究もありますが、こと大燈国師研究の分野では、まだまだ整理されていない状況です。

かつて、世界的な〝禅ブーム〟ということがありましたが、それが本当の〝禅〟なのかというと、また別問題です。その時代に出た成果もあらためて再検討していかねばなりません。現代ではさらに色々なことが解明されてきて、今まさにその次の段階に進んでいるように感じます。

とにかく、大燈国師を研究テーマに選んだのは、素晴らしいことで、まず競争率ゼロに近いのですからね（笑）

メルクーリ氏　確かにその通りです。どちらかというと先行研究者との競争はありますが。

芳澤先生　ということは、あな

たが頑張ってこの山を登ることが出来れば、常に第一人者なるという可能性があるということですね。

メルクーリ氏　西洋でいう禅のイメージはかなり固定的なイメージがあると思います。禅という言葉も一人歩きしていて、誤解に近いものもあります。ですから、もう少し深く研究して禅の理解がより正確なものとなるよう伝えたいという思いがあります。

芳澤先生　日本でも誤解があると思います。文字で話したり、文章で書いてはいけない、それが禅だという考え方があるのは確かですが、文字を使ってはいけないなんてことはない。禅宗はじつは最も文献が多い宗派でもあります。みんながみんな黙っていれば良いのかという話になってしまいますよね。

三島由紀夫も強く影響を受けたとされ、晩年は失明した臨済宗の老師で、現代の白隠禅師とも呼ばれた山本玄峰老師という方がおられました。あるとき、招かれて単身でロンドンに行かれた。空港にお迎えの人が来ていたが、どこにいるのかが老師にはお分かりにならない。そのときに、老師は広い空港ロビーで大音一声、〝喝アアアアーッ〟とやられた。お迎えに来ていた人はただちに老師の所在を分かったということです。私の好きな話で、〝禅的〟とはどういうことかをよく表したエピソードだと思います。

しかし、研究者の場合、これと同じようなことをしても意味がないのです。極論を言えば30頁白紙の論文だとか、一文字〝喝〟とだけ書いた論文なんて採用されませんよね。研究の場合はやはり適切な言葉による説明が必要になるわけです。研究はやはり〝ことば〟です。宗教家の場合は厳しい修行をして、また社会に戻って来て、社会のために働いてもらわなければいけない訳です。単なる言葉の上での研究ではなく、そのような宗教を研究しているのだ、ということも自覚して取り組んでいただきたいと思いますね。

禅の理解がより正確なものとなるよう伝えたいという思いがあります

――芳澤先生からご覧になって、オズヴァルドさんの現在までの研究成果をどのように評価されますか？又今後どのような成果を期待されますか？

芳澤先生　まずは「大燈国師」の思想の研究というようなことは余りされていないと思いますが、そういう点でも、正面から取り組んでおられることが素晴らしいと思います。

古い資料、例えば写本など、中々面倒なことは日本人は取り組まないのですが、そういったものにも積極的に取り組んでおられますし、地道な姿勢がいずれは必ず実を結ぶのだと確信しています。

問題点に気付く、細かいところにこだわるという感覚が、彼は鋭いというかとても良い点だと思います。

まずは論文を仕上げてもらいたいですが、それが完成したら世界に発信して欲しいと思います。１００メートルの深さの穴を掘ろうとしたら、直径でいうと何キロメートルの幅で掘りはじめなくてはならない。矛盾しているようですが、深く掘るためには広く掘り始めなくではいけないんです。

日本に滞在している間にひろい視野で常に色んなことに目を向けて欲しいと思います。彼の脳みそはイタリア製で性能が良いので、きっと色んなことを吸収していってくれると思います（一同笑いながら）。どんな学問にも言えることですが、ひろく知ることによって深まるのだと思うのです。また、禅はあくまで宗教なのであって、単なる研究で終わってしまってはいけない。研究を生活の為だけにしている人が多いのですが、そういう研究ではダメだと思っています。宗教は人間の生き方に深く関わるところですから、研究成果を出来るだけ多くの人に、宗教や思想の魅力が伝わるように、一生をかけて是非社会に還元していってほしいと思います。研究を進めていく上で、是非日本の文化・風習にも興味を持ち学んでいってほしいものだと思います。

メルクーリ氏　こういった大きな期待を寄せて下さるのは本当に刺激になりますので素直に嬉しいです。

――ではBDK Fellowship受給後の展望をお聞かせ下さい。

メルクーリ氏　もう少し日本に滞在してこの研究を続けたいと思っていますし、もっと先の夢としては、この研究を仕事として続け、プロの研究者として独り立ち出来ればと思います。理想としては、これからも研究者として研究に没頭し、翻訳作業にも力を入れていきたいと思っていますが、将来的に研究がすすめば、その先には人に教える

ということにもなっていくと思います。

現在西洋人の中でそれを同じ西洋人に伝えられる人は少ないので、どういう形かはまだ分かりませんが、自らがそういった存在になっていけたら、とも思います。現状では母国イタリアの大学での教職は考えられないのですが、状況が変わればその可能性もあるかもしれませんね。しかしこういう研究はある程度の成果が出るまでには時間がかかるもので、日本で先生について研究を進めなければ中々そこまでは到達出来ないと思います。

やはり欧米人と日本人や中国人の研究者では基礎知識の差が大きいので、それこそ子供が学ぶかの如くゼロから勉強しなくては、なかなか研究という域までは辿り着かないので、それらを補う為に、出来るだけ長い時間をかけてじっくりと日本で研究を進めていけたらと考えています。

――実際にBDK Fellowshipを受給する立場になり、また受給者を指導する立場になられて、何かお気づきの点はありますか?

メルクーリ氏　まず第一には、日本でしっかりと研究が出来るようにと配慮されている点が素晴らしいと思います。経済的にも心配することなく、健康保険などもあり本当に有り難い限りです。個人差はあるとは思いますが、生活費として支給されている額は貯金できる位充分で、私の場合は、それをまた自分の研究に役立てています。ですから安心して先を見越した研究計画を立てられるということですね。

研究者としてはまだまだ若い私ですが、やはり研究するならばある程度は認められたいと思いますから、経済的にもですが、世界の仏教学をリードする仏教伝道協会さんから奨学金をいただけるという事実が、自分の研究はある程度は価値があると評価していただいているようで、大変名誉なことだと思っています。

本来日本の禅の研究は、やはり日本で行われるべきだと思いますので、信頼のおける素晴らしい先生がたに御指導をいただきながら日本で研究ができ、世界各国から集まった優秀な研究者たちとも交流を深めることも可能だという環境は私のような未熟な研究者にとっては本当に価値ある経験になっています。

そしてこちらの奨学金の応募条件で良いと思ったところは、他の奨学金では博士論文を完成させていることが条件に挙げられることが多いのですが、BDK Fellowshipは、これから博士論文を完成させる予定の人、未来のある若手研究者である、という点で大変有り難いと思っています。

芳澤先生　そして応募・審査・決定までが迅速且つ家族的な対応をしてくださるところが特に良いと感じた点ですね。

仏教伝道協会さんには、本当に大きな、大乗的精神でなさっていただいていると思います。残念ながら現状の各宗派は、教学面での支援態勢というのは完璧ではないと思うのです。それに反して近年欧米での仏教に対する関心はどんどん高まっているので、外国人研究者への奨学金という形で応えていただいて本当に感謝しています。

仏教を中心として今世界では日本文化というものへの関心がすごいですよね。「かわいい」とか「アニメ」とかに象徴されますが、ヨーロッパでは今、どこの大学も日本学科への入学希望者が急増しているそうです。彼らの興味の中心はいわゆる日本の「ポップカルチャー」と呼ばれるものですが、私は悪くないことだと思っています。この中から本来の日本文化の背景に在るもの、仏教や神道などを学ぼうとする学生たちが出てくるかもしれない。そういう大きな精神で活動をしていただいている仏教伝道協会さんには本当に感謝しています。

――最後に芳澤先生から今後受給を希望される学生・研究者へのアドバイスをお願い致します。

芳澤先生　オズヴァルドさんを見習って、とにかく実直に。〝実直〟であるということは、大事なことだと思っています。大きな計画を立てるのも良いのですが、いきなり大きなことは誰しも出来ません。大きな計画の中で、小さいなスパンをいくつも決めて、実現可能なところから少しずつ積み重ねた上で来日して、更なる研究を進めていただきたいなと思います。

以上のように今後の豊富も力強く語ったくれたメルクーリ氏の更なる活躍にも期待を込めつつ、今後の奨学金制度の益々の発展を望む声は後を絶ちません。平成26（２０１４）年度第24回奨学生の詳細、平成27（２０１５）年度 第25回奨学生の募集に関する情報は、当財団公式ウェブサイトをご確認ください。

第47回　仏教伝道文化賞

文化賞概要と受賞者の紹介

仏教伝道文化賞／沼田奨励賞

平成24（2012）年度より、従来の仏教伝道文化賞A項、B項、C項・功労賞の区分をなくし、長年に亘って仏教文化伝道に貢献のあった方または団体に「仏教伝道文化賞」を、また今後の仏教伝道を通じた文化活動の振興が、大いに期待できる方または団体に「仏教伝道文化賞　沼田奨励賞」を贈呈することとなりました。

第47回　仏教伝道文化賞

平成25（2013）年10月2日（水）、仏教伝道センタービル（東京都港区）にて贈呈式ならびに祝賀披露宴を執り行ないました。

受賞関係者と沼田会長

審査報告をする木村清孝選定委員長

受賞スピーチをする、多山報恩会佐藤仁理事長（左）と長倉伯博師（右）

仏教伝道文化賞
沼田奨励賞

長倉 伯博 氏

昭和28（1953）年鹿児島県生まれ。終末期医療の現場で患者に寄り添い対話し、臨床僧侶としてケアに日々取り組まれ、仏縁を結ぶビハーラ活動を地道に広げられています。

（写真：多山報恩会
設立者　故 多山恒次郎氏）

仏教伝道文化賞

一般財団法人
多山報恩会

昭和18（1943）年設立。福祉、社会事業等の発展に寄与され、広島赤十字・原爆病院にて始めた月１回の仏教講演会は、平成25（2013）年８月で631回を数え、現在も続けられています。

慰霊碑周辺に花壇を制作する学生たち

作業前　慰霊碑に手を合わせる学生たち

ＢＤＫ東日本大震災復興支援
～学生ボランティア活動

ボランティア活動を経て
［参加学生による各地での展示会開催報告］

平成23（２０１１）年に発生した東日本大震災以降、仏教伝道協会では、これまで平成23（２０１１）年にＢＤＫ復興支援団体助成金」、平成24（２０１２）年に「ＢＤＫ被災保育施設支援金」というかたちでの助成を行ってきました。本年は、「ＢＤＫ復興支援学生ボランティア活動」として、全国の仏教系大学を中心に参加を募ったところ、中国やタイからの留学生を含む学生34名より応募があり、一般社団法人気仙沼復興協会様のご指導のもと、宮城県気仙沼市および岩手県陸前高田市において９月４日より３泊４日の活動を（被災ホテル・一景閣：気仙沼市を拠点に）行いました。

宮城県気仙沼市においては海岸清掃および（避難所にて多数の方が亡くなられた跡に建てられた）慰霊碑周辺の花壇作りなどを主な活動とし、それらに加え被災寺院（臨済宗妙心寺派地福寺：片山秀光住職：気仙沼市）を会場としてお借りし、ゲストに三野姫（渡辺英樹氏・野村義男氏によるアコースティックデュオ）、沢村まみとＪＰＳＡ（第14回仏教音楽祭第１位受賞者）を迎えた復興支援コンサートを開催しました。当日は近隣住民の方がたが多数来場され、みんなで一緒に歌を口ずさんだり、三野姫の軽妙なトークに終始笑顔が見られ、一時ではありましたが、リラックスした時間を過ごされていました。片山住職からは当時の被災状況を自ら撮影した映像や写真を交え、全壊後再築された本堂の壁に記された津波の痕跡を見つめつつ、壮絶な経験談を伺いました。コンサート後には住民の方がたと膝を交え様々な被災体験をお伺いする機会を持つことができ、学生たちにとっても生の声を聴かせていただく大変貴重な機会となりました。

岩手県陸前高田市においては、津波によって流されたＪＲ陸前高田駅の跡地や「奇跡の一本松」などを現地ガイドの案内のもと視察し、自然への畏怖を直に感じる機会となりました。また、震災当時、避難所として児童約80名を含む多くの方がたを受け入れた寺院（曹洞宗興福寺：須田玄峰住職：気仙沼市）も訪問させていただき、当時の状況について須田住職と奥様の祐子氏より伺いました。被災当時の話は想像を絶する状況ではあったものの、当時の記録として撮られたアルバムを覗くとそこには笑顔

国宝金堂（仁和寺内）

京都地区から参加した３名（魏さん・燕さん・森さん）

で写る人々の姿がありました。厳しい状況に置かれながらも皆が助け合い自主的に掃除や洗濯をしたり、子供たちも奥様の合掌する姿を見て自然に手を合わせるようになったとか。学生たちもそのような話やアルバム、そこで暮らしていた方がたの手紙など、食い入るように見つめていました。

その後、金田諦應師（曹洞宗通大寺住職：栗原市）による〝傾聴ボランティア〟についての話を伺いました。金田師は「Café de Monk（カフェ・デ・モンク）」という傾聴移動喫茶の店長を務め、宮城、岩手の被災各地を数十回にわたって訪問し、被災者の〝心〟に寄り添う活動をされてきました。カフェはオープンテラス式で、コーヒー豆はキーコーヒーからの提供、ケーキとともに全て無料で提供しているそうです。カフェでお坊さんたち【モンク】がみなさんの【文句】を聴きましょう、テーマ曲として【セロニアス・モンク】を流しながら、という洒落の効いた一見楽しそうに聞こえる活動も、やはりその場その場での空気感を読みながらの難しい活動であったとのこと。学生たちは金田師の話に引き込まれつつも〝傾聴〟活動の難しさを実感し、様々な入り口から今回の「震災」について学びを深める機会を得ることが出来ました。

こうして３泊４日という短期間ではありましたが、今回のボランティア活動を通して学生たちが経験したことを共有し、拡散してほしいという願いのもと、活動報告として参加学生それぞれの地域において、写真展示会を開催することとなりました。

京都地区から参加した３名（種智院大学：森春輝さん、龍谷大学：魏芸さん、燕鈴さん）は、京都という世界有数の観光地という土地柄、より多くの方々に今回の活動を知っていただきたい、被災地を忘れてほしくないとの願いから、その想いにご賛同いただいた真言宗御室派総本山である仁和寺様（仁和寺門跡第50世立部祐道門主：京都市右京区 http://www.ninnaji.or.jp/）のご厚意で境内の一角をお借りし、写真展示会を開催させていただきました。

世界遺産にも登録されている日本屈指の寺院、仁和寺での開催とあって学生たちも緊張の面持ちでしたが、普段の学生生活の中では余り接することの出来ない幅広い年齢層の観光客の前で、被災地の状況を誠心誠意ご案内しました。境内にうっすら雪も積もる1月の寒い時期ではありましたが、多くの方がたが足を止め、じっくりと展示を見て下さいました。傍らに設置した被災地の皆さまへのメッセージ・ボックス（後日直接被災地に送付）には、展示を見て下さった方の多くが、時間をかけ丁寧に応援メッセージを寄せて下さり、案内役の学生３名と直接会話を交わしながら、寒いながらも大変心温まる展示会となりました。

仏教伝道協会では、今回の活動をさせていただいた気仙沼市をはじめとする被災各地の今後の復興・発展を強く願いつつ、活動に参加した学生たちが今回の活動を通じて学んだことを日々の生活に活かし、社会に貢献していってくれることを願っています。

展示に見入る観光客の方がた（仁和寺）

その他助成事業報告

仏教伝道協会では仏教精神、仏教文化の興隆活動を積極的に展開している国内外の団体等への助成支援事業を展開しており、平成25（2013）年、助成先のひとつである全日本仏教青年会（伊東政浩理事長）が主催する「国際仏教徒青年交換プログラム（International Buddhist Youth Exchange; IBYE）」への助成を行いました。

このプログラムは、世界仏教徒青年連盟（World Fellowship of Buddhist Youth; WFBY）が、青少年を対象に将来の社会的リーダーの育成・青少年の国際交流・伝統的仏教文化のグローバル化をめざし世界各国で長年取り組まれているものです。今回は、WFBY日本センターを担う全日本仏教青年会が、その人道支援委員会（委員長・村山博雅WFBY副会長）として、平成23（2011）3月11日に発生した東日本大震災による被災地に関わる様々な事象を、実際にその空気に触れることにより正確に理解し、その内容を国際社会に発信し、特に福島の放射能問題に関する正しい情報、認識を持ってもらいたいという願いのもと、平成25（2013）年8月25日から30日まで、タイ、台湾、マレーシア、韓国の青年仏教徒24名と日本の青年僧・学生ら32名、運営スタッフなど合計約100名が参加し、福島県いわき市にて開催されました。

期間中、参加者らは津波被害を受けたいわき市の久ノ浜や薄磯地区の視察、地元でボランティア活動に取り組む方や原発事故後、自ら除染作業に取り組み、さらに除染で除去された受け入れ先のない汚染土などを自らの寺の所有地を仮置き場として提供し、活動する曹洞宗僧侶阿部光裕師のお話しを聴き、仮設住宅にて行茶（傾聴）活動、津波で大きな被害を受け生徒2名が犠牲となったいわき海星高校の生徒との交流、慰霊法要などを行いました。

本プログラムを通じ、異文化で育つ海外と日本の青年が仏教という繋がり、釈尊の教えの元にひとつであるという共通点をもって交流し、震災、原発被害の現状について見聞きし学び、語り合い、理解を深めました。そして同時に懸命に復興に取り組む被災者の心に触れ、青年として、仏教徒としてこれからの被災地の復興と日本のありかたについて考えることができた、素晴らしいプログラムとなりました。

いわき市薄磯海岸での追悼法要

参加者によるグループワーク

【全日本仏教青年会】

▼全日本仏教青年会（All Japan Young Buddhist Association; JYBA）は1977年に設立された、日本全国の宗派・地域の垣根をこえて活動する仏教青年団体。

現在、9宗派の全国青年会と4地域の仏教青年会が参加加盟している。

また、世界仏教徒青年連盟（WFBY）の唯一の日本センターでもあり、全世界の仏教徒との交流を深めつつ、仏教文化の宣揚と世界平和の進展に寄与することを目指している。

（全日本仏教青年会HP http://www.jyba.ne.jp/）

3 啓蒙活動・支援事業・仏教講座の開催

Enlightenment / Support / Buddhism course

01 Activity

第43回実践布教研究会

於 日蓮宗総本山 身延山久遠寺

平成25(2013)年6月4日～6日にわたり、日蓮宗総本山 身延山久遠寺にて、「布教伝道 日蓮聖人に学ぶ」をテーマに掲げた「第43回実践布教研究会」を開催しました。

全国各地よりご参加いただいた各宗派の僧侶、寺族約60名の参加者が2泊3日の研修を行いました。

開催期間中、日中は諸堂参拝や水行体験、諸先生方による唱題行等実践も含めた講義、夜は遅くまで「日本仏教の未来～30年後果たして日本仏教(伝統教団)は残っているだろうか～」と言う議題に沿って研鑽を深め、充実した研究会となりました。

高座説法

水行体験

Kiroro

楽友会（築地本願寺本堂）

Activity 02

Buddhaspel（ブッダスペル）チャリティ・コンサート
～Light of Hope 希望の光 第16回仏教音楽祭～

平成26（2014）年3月12日（水）、「Buddhaspel（ブッダスペル）チャリティ・コンサート～Light of Hope 希望の光 第16回仏教音楽祭～」（於 浄土真宗本願寺派 築地本願寺本堂）を開催しました。（チケット売上や来場された皆さまからの募金は岩手県が設立した「いわての学び希望基金」へ全額寄付）

当日は岩手県知事夫人をはじめとする本堂一杯、500名以上もの方がたにご来場いただき、その熱気に包まれるなか開演を迎えました。佛教讃歌の集「楽友会」によるパイプオルガンを交えた演奏に続き、特別ゲストとして沢村まみとJPSA（第14回仏教音楽祭第1位受賞者）を迎え第1部を、第2部はKiroroによる心温まる歌声を存分にお届けするコンサートとなりました。

今回は、それらに加え、東日本大震災によって被災した岩手県立大槌高等学校吹奏楽部の生徒さん方を招待させていただきました。家族や友人を失ったことで、心の傷が癒えない状況ではあるものの、持ち歌としているKiroroの曲にのせられた前向きなメッセージを受け取りつつ、一時ではありますが、リラックスした時間を過ごしていただけたようです。

被災地への様ざまな〝おもい〟と仏教の〝ご縁〟を感じていただき、来場者からは「是非また開催してほしい」との声が寄せられました。また音楽をご縁に〝ブッダスペル〟（「仏のことば」の造語）という新たなキーワードを刻んでいただく貴重な機会ともなりました。

沢村まみと JPSA

大槌高校吹奏楽部の皆さんと沼田会長

Activity 03

三田落語会

ことばに節をつけ身振り手振りを合わせて仏教の教えを説く「節談説教（ふしだんせっきょう）」は落語の起源となったとも言われます。この落語という仏教と結びつきの深い文化を通して、仏教精神に触れていただくことによって、仏教精神の涵養ならびに仏教文化を継承することを目的に「三田落語会」を主催しています。

仏教行事と多く重なる偶数月、2月：涅槃会（お釈迦さまが亡くなった日）、4月：花祭り（お釈迦さまの誕生日）、8月：お盆・盂蘭盆会、12月：成道会（お釈迦さまが悟りを開かれた日）をはじめとして6月、10月にも（年6回）開催しています。昼席、夜席の2部制となっており、毎回様々な方にご来場いただいています。

今後の開催スケジュールやチケット販売等、「三田落語会」の詳細は、公式ウェブサイトをご確認ください。

http://mita-rakugo.com/

仏教伝道センタービル８階「和」にて開催

Activity 04

仏教聖典を初歩英語で学ぶ会

「仏教聖典を初歩英語で学ぶ会」は、英語という道具を用いて、仏教に親しみ、理解を深めていただきたいという願いから、ケネス・タナカ師（武蔵野大学教授）を講師としてお迎えし、平成24（2012）年9月から開講しました。

当初は、当協会刊行の『和英対照仏教聖典』をテキストに講義を進めていましたが、平成25（2013）年度からは『日本の仏教宗派』を加え、修学カリキュラムの充実化を図りました。

また平成26（2014）年度は、仏教伝道協会が制作したTV説法をテキストに講義を進めていく予定です。このTV説法には、世界で活躍している僧侶・研究者のインタビューも収録されており、世界の仏教を幅広く学ぶことが出来ます。（当協会公式ウェブサイト英語版にて無料で閲覧可能です）今後も英語を通じて仏教に親しむことの出来る講座を提供していく予定です。

05 Activity 仏教聖典を経営に活かす会

仏教伝道協会では、経営者の方には「人を大切にする経営を」、一般の社会人の方がたには、「人生の道標の一助となるように」、仏教が持つ東洋の叡智と慈悲の精神に一人でも多くの人が触れていただくことを目的に月に一度「仏教聖典を経営に活かす会」を開催しています。

「仏教聖典」を経営に活かす会（講師：逸見道郎先生）

講師：木村清孝先生

原則毎月第3水曜日に、専任講師をお迎えして「仏教聖典」を使用し、実際に即したテーマを取り上げて講義をしていただいます。講義の後は講師への質問や会員同士の懇談、情報交換の場として懇親会を開催しています。

講師は2名、東京大学名誉教授で曹洞宗龍宝寺住職の木村清孝先生、日本テレビにて「宗教の時間」ディレクターも務めたこともある浄土真宗本願寺派浄土寺住職逸見道郎先生を月替わりでお迎えし、毎回40名前後の会員が参加しています。

普段は会社のトップに立つ参加者も熱心にメモをとり頷く姿が印象的です。欲望を断ち切ろうとするのではなくコントロールしていくこと、先入観にとらわれず視点をひっくり返すことによって実践していくことなど、日々の社会生活にも役立つ内容が満載の一時間です。

「仏教聖典を経営に活かす会」の詳細は、当財団公式ウェブサイトをご確認ください。

06 Activity 仏教聖典を生活に活かす会

「仏教聖典を生活に活かす会」は、宗派にとらわれず、仏教精神を日常生活に活かすことを目的に「仏教聖典」をテキストとした、ユーモア溢れる講師の話と和やかな雰囲気の中で、仏教精神に触れることが出来る会となっています。

講師：ケネス・タナカ先生

原則毎月第4木曜日の昼に、専任講師をお迎えして「仏教聖典」の講話に続き、質疑応答を挟んで、お茶をいただきながらの座談会を開催しています。年齢、性別等一切不問の会ですので、どなたでも気軽にご参加いただけます。

講師は2名、天台宗ハワイ開教師、ハワイ州立大学講師等海外経験豊富な天台宗勧学・天台宗泉倉寺住職の一島正真先生、日系三世で武蔵野大学教授・同大仏教文化研究所所長のケネス・タナカ先生。毎回2～30名が参加、仏教というメガネをかけることにより、物事の本質がより見えるようになること、日々の生活に密着した〝おかげさま〟のこころに気付く時間となっているようです。

「仏教聖典を生活に活かす会」の詳細は、当財団公式ウェブサイトをご確認ください。

「仏教聖典」を生活に活かす会（講師：一島正真先生）

阿純章 師

忙しい女性のための坐禅会

阿純章 師（坐禅会 講師・天台宗 円融寺 住職）を囲んで　参加者の声をご紹介

平成25（2013）年度より、坐禅を通して日頃の疲れたこころや頭の整理をする機会となればとの想いから始まった〝忙しい女性のための坐禅会〟ですが、回を重ねる毎に様々な方がたにご参加をいただきました。ストレスの多い現代社会ですが、その中で、少しでもほっと一息ついて自分自身を見つめ直すことが出来る空間を提供出来ればということで、講師に阿純章師（天台宗円融寺住職）をお迎えし、女性限定ということで１年間開催させていただきました。

１回５００円の参加費で自由に参加出来るとあって、忙しい方でも無理なく参加いただくことができ、のべ１０４名の方がたにご参加いただきました。毎回坐禅指導をお願いしてきた阿先生と実際坐禅会に参加いただいた皆さまに、ご感想を伺いました。

――〝坐禅会〟は、仏教伝道協会としても初めての取り組みで、加えて全て女性の参加者ということでしたが、１年間担当されてみていかがでしたか？

阿先生　そうですね。自坊でも坐禅指導をする機会はありますが、女性だけの会はないので珍しい取り組みだったと思います。ほぼ9割が30～40代の仕事をもつ女性だったこともあり、皆さん同じような波長で、意外と取り組みやすかったですね。皆さんの感性の豊かさにも驚かされましたが、何よりもこういう場を提供するお手伝いが出来て良かったなと感じました。これは私個人の意見ですが、男性はどちらかというと坐禅というものに対して理屈先行型の方が多いのですが、女性は、良さそうだと思ったら何でも気軽に取り入れる。坐禅はきっと女性的だと思います。

――〝坐禅〟の効果とは？

阿先生　皆さん将来の不安、今の自分が正しいのかどうか、他人と比較したり、過去を振り返ったりすると思いますが、坐禅を通じて、自分自身を見つめなおした上で、今の自分で良いのだと認めることが出来ます。そして、坐禅の後の茶話会では、悩み相談などもお伺いしたりして、お帰りになる頃には皆さま表情もすっきりして、リセットしていかれます。リラックスして自分の内側を見つめ直すことによって本来の自分を取り戻し、〝今〟の自分が幸せになることを意識する、毎日が新年を迎えるような気分でいることが出来ます。今ここに寛ぎ、今の自分が１００％であると認めることによって、自信をもつことが出来ますしね。

参加者の声

ＹＫさん　30代
渋谷区在住／セラピスト
ＥＨさん　40代
横浜市青葉区在住／公務員

――坐禅会に参加したきっかけは？

ＹＫさん　以前から〝坐禅〟自体に興味はあったのですが、なかなか踏み出すきっかけがありませんでしたが、阿先生のご紹介で参加してみようと思いました。

ＥＨさん　私は、たまたま友人の紹介で訪れた向源という仏教系フェスで、この会のことを知りました。坐禅の経験はありませんでしたが、〝女性のための〟というフレーズに女性専用車両のような安心感を持ち、参加してみようと思いました。

――参加の目的は？

ＹＫさん　巷ではヨガなどの仏教ブームですが、正直、ヨガには少々敷居の高さを感じていました。忙しい日常の中にも自分の心を静観したかったので、坐禅は私にとってはぴったりだと思いました。

ＥＨさん　坐禅のイメージ的に、暗く静かな雰囲気の中、何も考えないことで、リラックス出来そうだなと。子育て、仕事など、自分一人の為に使うことの出来る時間が少ないので、自分自身を見つめ直す時間が持てたらなと思っていました。

――実際参加してみていかがでしたか？

ＹＫさん　女性同士ですし、初心者率も高くて馴染みやすかったです。毎回参加自由というのも気軽な気持ちで参加出来ますし、阿先生のお話が分かりやすくて、坐禅に取り組むヒントになりました。

ＥＨさん　常に追われる生活なので、大事なことを取り戻せる時間というか、完全に無になれる貴重な時間だと思います。女性だけなので、周りの目も気にせず、リラックスした雰囲気の中、自分という存在を考えるきっかけになったと思います。

平成26（２０１４）年度からは、好評につき、男女どなたでもご参加いただける〝働くひとのための坐禅会〟として新たに開催させていただくこととなりました。原則毎月第３火曜日夜８時～疲れたこころと頭の整理に、是非お気軽にご参加ください。

◎参加に関する詳細は当財団公式ウェブサイトまたはfacebook“ＢＤＫ坐禅会”をご確認ください

Symposium

平成25（2013）年度
BDKシンポジウム
～日本仏教とは～

仏教伝道協会では、「日本仏教とは」を平成25（2013）年度の年間テーマに掲げ、全３回のシンポジウムを企画、開催しました。

第１回目は、仏教伝道協会の〝公益財団法人〟移行記念として、『バカの壁』などの著書でおなじみの解剖学者で東京大学名誉教授でもある養老孟司氏を講師に招き、記念講演会「日本仏教精神の再興―信仰と寺院の役割―」を開催しました。

講演では、縁起の法則や空の思想に代表される仏教的な価値観・思考方法が、現代を生き抜く鍵になることが示されました。

続く第２回目は、シンポジウム「ここがスゴイよ日本人の仏教観」を開催しました。

「信仰」という点に着目し、日本で活躍中の３名の外国人僧侶、アルボムッレ・スマナサーラ師（スリランカ出身、日本テーラワーダ仏教協会長老）、ネルケ・無方師（ドイツ出身、曹洞宗安泰寺住職）、ケネス・タナカ師（米国出身、浄土真宗の僧籍をもつ哲学博士・国際真宗学会会長）をパネリストとしてお迎えし、日本人の仏教観・宗教観の素晴らしさについて、普段気付くことの出来ない視点で議論していただき、日本に息づく仏教精神の良さが再考されました。

平成25（２０１３）年度最後となる第３回目は、「寺院の役割」という点に着目し、『頑張れ仏教』や『「生きる力」としての仏教』等の著書の中で「お寺ルネッサンス」という言葉を用い、寺院の潜在性を主張されている上田紀行氏（東京工業大学教授）を講師として迎え、今後の日本仏教寺院の役割とその可能性についてお話いただきました。

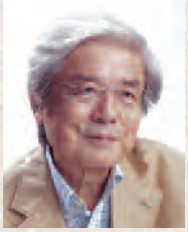
毎回会場を埋め尽くす出席者からは、「貴重な機会であった」「またこのような機会に参加したい」と次回開催を望む多くの声が寄せられました。仏教伝道協会では、今後もより多くの皆さまが気軽に仏教に触れていただけるよう、その機会づくりに尽力していきます。

（※平成25年度ＢＤＫシンポジウムは、すべて当協会ＨＰ内ＢＤＫ動画配信より無料で視聴可能です）

第１回

日本仏教精神の再興
― 信仰と寺院の役割 ―

平成25（2013）年４月11日
講師／養老 孟司 氏



●1937年、神奈川県鎌倉市に生まれる。東京大学名誉教授。専門は解剖学。2003年に出版した『バカの壁』（新潮社）で毎日出版文化賞を受賞、さらに題名の「バカの壁」は、同年の新語・流行語大賞を受賞した。その後も同種の一般向け著書を数多く執筆している。

第２回

ここがスゴイよ 日本人の仏教観

平成25（2013）年９月19日

アルボムッレ・スマナサーラ 師

●1945年スリランカ生まれ。スリランカ上座仏教（テーラワーダ仏教）長老。13才で出家得度。国立ケラニヤ大学で仏教哲学を教える。1980年に来日。駒澤大学大学院博士課程を経て、現在は宗教法人日本テーラワーダ仏教協会で初期仏教の伝道と瞑想指導に従事し、釈迦牟尼仏陀の根本の教えを説き続けている。

ネルケ・無方 師

●1968年ドイツ生まれ。16才で坐禅と出合う。1990年に初めて安泰寺に上山、半年間の禅修行。大学のドクターコースを中退、1993年に出家得度。2001年から大阪城公園で「ホームレス雲水」として坐禅会を開く。2002年から檀家ゼロ、自給自足の安泰寺の住職。国内外からの参禅者・雲水の指導にあたって共に修行生活を送っている。

ケネス・タナカ 師

●1947年山口県生まれ。アメリカ育ち。日系三世。スタンフォード大学卒業。東京大学大学院修士課程修了。カリフォルニア大学バークレー校博士課程修了。カリフォルニア州Institute of Buddhist Studies助教授。South Alameda County Buddhist Church住職。現在、武蔵野大学教授、国際真宗学会会長。日本仏教心理学会会長。

第３回

日本仏教寺院の役割とその可能性

平成26（2014）年４月21日

講師／上田 紀行 氏

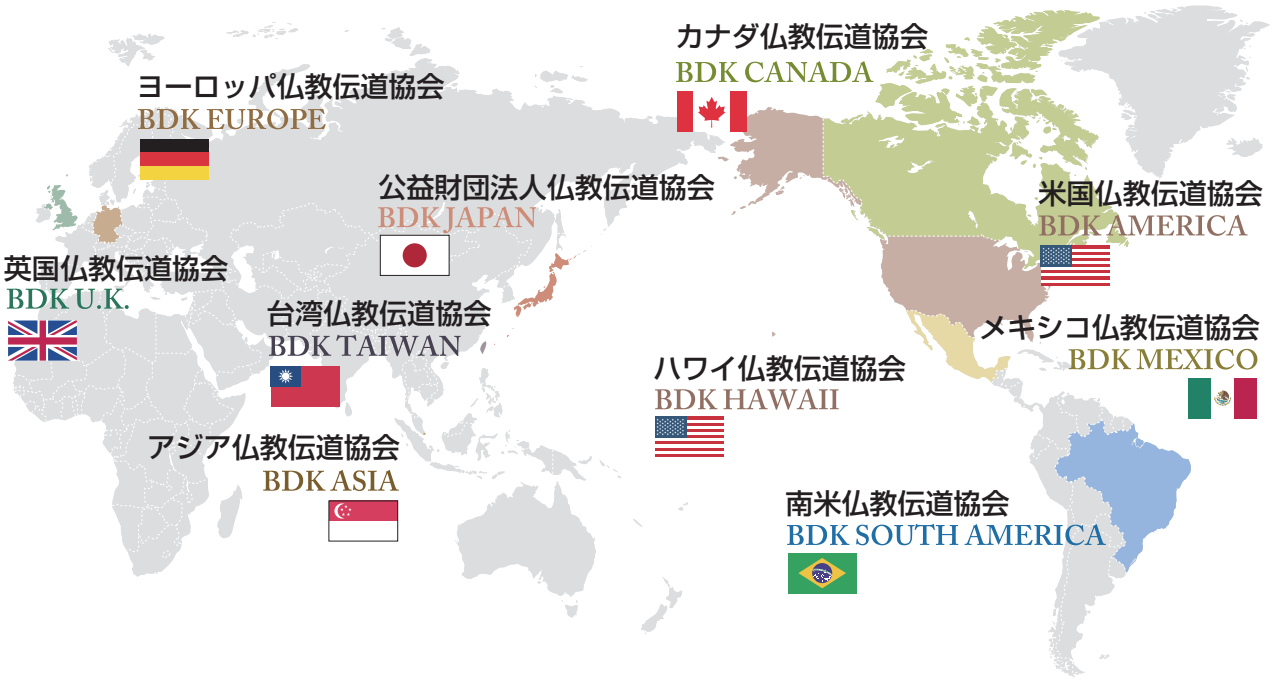
●文化人類学者、医学博士。東京工業大学リベラルアーツセンター教授。兼任・社会理工学研究科価値システム専攻。1958年東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了。愛媛大学助教授(93～96年)を経て、96年４月より、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻准教授。 2012年2月より、現職。

海外協力機関のご紹介

北 米 圏
アメリカ
ハワイ
メキシコ

欧 州 圏
ドイツ

当財団では、同じ目的を持つ海外の団体と協力し、さまざまな公益事業を行っています。特に米国、ハワイ、カナダ、メキシコ、ドイツ、イギリス、ブラジル、シンガポール、台湾にはそれぞれ独立した仏教伝道協会があり、世界中のホテルや施設等への「仏教聖典」の頒布活動を互いに協力し推進しています。仏教の説く慈悲と共生の精神を世界のひとりでも多くの人に伝え、人類の幸福と世界平和の実現を目指し、グローバルな活動を展開しています。



お問い合わせ一覧

●各国での「仏教聖典」頒布やその他活動の詳細に関するお問い合わせは、お近くの仏教伝道協会までお願いします。

北米地区

米国仏教伝道協会
BDK America

2620 Warring Street,
Berkeley, CA 94704 U.S.A.
Tel: +1(510)843-4128 Fax: +1(510)845-3409
E-mail: orders@bdkamerica.org（対応言語：英語）
http://www.bdkamerica.org

ハワイ仏教伝道協会
BDK Hawaii

1757 Algaroba Street,
Honolulu, HI 96826, U.S.A.
Tel: +1(808)942-1511 Fax +1(808)942-2622
E-mail: bdkhawaii@gmail.com（対応言語：英語）
http://www.bdkhawaii.com/

カナダ仏教伝道協会
BDK Canada

c/o Mitutoyo Canada Inc.
2121 Meadowvale Blvd.
Mississauga, ON, CANADA L5N 5N1
Tel: +1(905)821-1261 Fax: +1(905)821-4968
E-mail: honjo@bdkcanada.com（対応言語：日本語・英語）

中南米地区

メキシコ仏教伝道協会／メキシコ恵光寺
BDK Mexico

Prolg. Eugenia No. 17, Col. Nápoles, C.P.03810
México D.F., MEXICO
Tel/Fax: +52(55)5669-1088
E-mail: bdkmexico@prodigy.net.mx（対応言語：日本語・スペイン語）

南米地区

南米仏教伝道協会
BDK South America

a/c Mitutoyo Sul Americana Ltda.
Av. João Carlos da Silva Borges, 1240 CEP 04726-002,
Cx. Postal 4255, Santo Amaro, São Paulo-SP, BRAZIL
Tel: +55(11)5643-0006 Fax: +55(11)5641-3745
E-mail: bdk@mitutoyo.com.br（対応言語：日本語・ポルトガル語）

欧州地区

ヨーロッパ仏教伝道協会／ドイツ恵光日本文化センター
BDK Europe (EKŌ-Haus der Japanischen Kultur e.V.)

Brüggener Weg 6,
40547 Düsseldorf, F.R. GERMANY
Tel: +49(211)577918-0 Fax: +49(211)577918-219
E-mail: pool@eko-haus.de（対応言語：日本語・ドイツ語）
http://www.eko-haus.de

英国仏教伝道協会
BDK U.K.

c/o Mitutoyo(UK)Ltd. Joule Road, West Point
Business Park, Andover, Hants SP10 3UX U.K.
Tel: +44 1264-353123 Fax: +44 1264-354883
E-mail: bdk@mitutoyo.co.uk（対応言語：日本語・英語）

日本以外のアジア地区

アジア仏教伝道協会
BDK Asia

c/o Mitutoyo Asia Pacific Pte. Ltd.
24 Kallang Avenue, Mitutoyo Building,
Singapore, 339415, SINGAPORE
Tel: +65 6294-2211 Fax: +65 6299-6666
E-mail: bdk@mitutoyo.com.sg（対応言語：日本語・英語・中国語）

台湾仏教伝道協会
BDK Taiwan

4F., No.71, Zhouzi St., Neihu Dist.,
Taipei City 114, TAIWAN (R.O.C)
Tel: +886(2)8752-3636 Fax: +886(2)8752-3267
E-mail: sharon@mitutoyo.com.tw（対応言語：日本語・英語・中国語）

米国仏教伝道協会

平成25（2013）年度 〝沼田智秀仏教書籍優秀賞〟受賞者決定

昭和53（1978）年に設立された米国仏教伝道協会では、英訳大蔵経翻訳出版事業の推進、「仏教聖典」のアメリカ国内ホテル、刑務所、公共施設への寄贈など中心にカリフォルニア州バークレーにて活動しています。

平成21（2009）年には、西洋における仏教学研究のさらなる発展を目的とし、カリフォルニア大学バークレー校（以下UCバークレー）の仏教学センターに〝沼田智秀仏教書籍優秀賞〟（Toshihide Numata Book Prize in Buddhis：通称Toshi Prize）の設立を支援しました。以来、米国で審査委員会が開催され公正な審議の上、英語で執筆された仏教学術書籍の中から優秀な書籍が選定されています。

受賞者には賞金が贈呈され、受賞式と記念講演が米国・カリフォルニア州バークレーにて開催されます。過去にはジェイムス・ロブソン博士（ハーバード大学）、トッド・ルイス博士（カレッジ・オブ・ホーリークロス）（共著者：サバルナ・マン・トレイダー教授）などが受賞しています。

平成25（2013）年度の受賞は、ダニエル・アーノルド博士（シカゴ大学）の〝Brains, Buddhas, and Believing: The Problem of Intentionality in Classical Buddhist and Cognitive-Scientific Philosophy of Mind〟（コロンビア大学出版：2012年）です。11月15日に執り行われた受賞式では、記念公演（於バークレー・浄土真宗センター）として、〝心の仏教哲学を真摯に受け止める〟と銘打ち、シンポジウムを開催しました。その他にもアーノルド博士の著書である“Buddhists, Brahmins and Belief: Epistemology in South Asian Philosophy of Religion”は、アメリカ宗教学会主催の宗教学優秀賞も受賞しています。また日本でも今回の受賞を記念し、公益財団法人 仏教伝道協会主催で、東京と京都でも講演を行いました。

沼田仏教書籍優秀賞に関する詳細はUCバークレー・仏教学センターのウェブサイト（http://buddhiststudies.berkeley.edu/bookprize/）または当財団公式ウェブサイトにてご確認いただけます。

※その他米国仏教伝道協会の活動に関する詳細は直接現地へお問い合わせ下さい。

“沼田智秀仏教書籍優秀賞”授与（アーノルド博士：左）

シャーフ仏教センター所長による審査報告

受賞基調講演をするアーノルド博士

メキシコ仏教伝道協会

NORTH AMERICA

メキシコ恵光寺外観

メキシコ恵光寺での〝仏前結婚式〟

昭和60（1985）年に設立されたメキシコ仏教伝道協会（メキシコ恵光寺）では、現在までにメキシコ全土の1000軒以上ものホテル並びにリゾートホテルの客室に「仏教聖典」を寄贈しており、その数は既に15万冊を超えています。メキシコ恵光寺においては、超宗派の単立仏教寺院として様々な日本文化の伝承を行いつつ、約2千万の人口を抱えるメキシコ市を中心に活動しています。

そのようなメキシコでは、時代の流れと共に様々な事柄に変化が生じています。その1つが〝結婚式〟に対する意識です。日本でも近年結婚式を挙げない夫婦や盛大に式・披露宴を執り行う夫婦など、結婚の形は多様化していますが、元来カトリック教国といわれるメキシコでは、カトリック教会における結婚式が大半を占めていました。しかし近年はそれも減少の傾向にあり、最近最も増えているのは婚姻届も出さず結婚式も行わないいわゆる内縁関係（同棲）のみの結びつきで、婚姻届の提出だけで結婚生活を始めるという夫婦も急増しています。これらの理由として多く挙げられるのは結婚式にかかる資金の不足だそうですが、そのような状況の中、現在日本的な〝仏前結婚式〟を挙げることが出来るメキシコ恵光寺が注目されています。

メキシコ恵光寺を訪れる方は、現地の人びとで大半を占め（平成24（2013）年現在、144名のメキシコ人門徒が在籍中）、平成24（2013）年度に恵光寺にて挙式をされたメキシコ人夫婦は4組にのぼります。その内3組が仏教徒として、残る1組も〝仏教〟に惹かれ仏式で華やかに結婚式を挙げたかったようです。カトリック教の中でも特に現地に根ざした聖母信仰が根強いメキシコにおいて、日本仏教寺院であるメキシコ恵光寺にて仏教徒となり、また日本の文武活動に多くの現地の方がたにお集まりいただいていると言う事は、メキシコ人の精神的支柱の変化をも予感させます。そして結婚という人生の大きな節目に〝仏前結婚式〟を希望される方が増えている等の事実も、超宗派を掲げるメキシコ恵光寺の活動が、仏教と日本文化の中心として徐々に現地に受け入れられつつあると言えます。

メキシコ恵光寺では、ご門徒さんをはじめとして、より多くの方がたが仏教に親しみを感じていただけるよう様々なプログラムを用意してその受け入れの準備をしており、〝仏前結婚式〟のように人生の節目にも気軽に取り入れていただけるような、より開かれた活動を目指しています。

※その他メキシコ仏教伝道協会の活動に関する詳細は直接現地へお問い合わせ下さい。

“仏前結婚式”を挙げたメキシコ人カップル４組

BDK ハワイ理事関係者と沼田会長

昭和53（1978）年に設立されたハワイ仏教伝道協会では、「仏教聖典」をハワイ、グアム、サイパン他の寺院、ホテルやその他施設へ寄贈し、地元に根ざした活動を目指しハワイ大学やチャミンナーデ大学に於ける教育プログラムの支援もしています。

平成25（2013）理事会

平成25（2013）年度ハワイ仏教伝道協会（BDKハワイ）理事会が2月14日にBDKハワイ事務局にて開催されました。日本からも沼田智秀会長、生田忠士常務理事が参加、BDKアメリカからはブライアン・ナガタ理事長など多数の参加がありました。

理事会後はマイケル・モア教授（ハワイ大学）、エリザベッタ・ポーシュ博士（ハワイ大学沼田講座担当教授）、ユーゴ・デッシ博士（ライプチ大学）、ケビン・クニユキ師（仏教学センター）らが昼食会に参加、交流を深め、昼食後は、ハワイ・日本文化センターにて開催されている〝ハワイにおける日本仏教寺院〟展（タナベ理事長主催）の見学へと向かいました（次記事に続く）。

〝ハワイに於ける日本仏教寺院〟特別展開催

BDKハワイ理事長・タナベ夫妻共著〝ハワイにおける日本仏教寺院図鑑〟（ハワイ大学出版）の刊行を記念し、ハワイ・日本文化センターにて開催された特別展示会は、好評につき2012年12月から2013年2月まで3ヶ月にわたって一般に公開されました。

期間中にはハワイ州知事・ニール・アバクロンビー氏も来場し、特に木製の薄く彫られた観音像（写真）に大変興味を示し、会期後には天台宗より寄贈された像を知事室に飾るなど、熱心に展示を鑑賞されました。

珍しい観音像に興味深々のアバクロンビーハワイ州知事（右）

ハワイ仏教伝道協会

ホノルル日本国総領事 重枝豊英氏(右)から旭日中綬章を授与され笑顔のBDKハワイ理事長 ジョージ・タナベ氏（左）

BDKハワイ・タナベ理事長 旭日中綬章受賞

BDKハワイ理事長でハワイ大学宗教学部名誉教授のジョージ・タナベ氏が平成26（2014）年1月、旭日中綬章を受賞しました。日本政府はタナベ氏の長年にわたる日本仏教学への貢献、ハワイ大学宗教学部での27年間にも及ぶ教授実績（平成18（2006）年に退官）を高く評価。

そして平成13（2001）年にオアフ島沖で発生した「えひめ丸」事故（愛媛県立宇和島水産高等学校の練習船「えひめ丸」が浮上してきたアメリカ海軍の原子力潜水艦「グリーンビル」に衝突され沈没した事故。乗務員の35名のうち、えひめ丸に取り残された教員5名、生徒4名が死亡し、救出されたうち9名がPTSD（外傷後ストレス障害）と診断された。）の際、当時ハワイ大学宗教学部長であったタナベ氏が、遺体引き揚げ時のあらゆる状況を想定し、若い米国人潜水士たちに、日本的な遺体や遺品そして遺族に対するきめ細やかな配慮と接し方を指導。引き揚げ作業を全面的に支援したことによって互いが冷静な行動をとることが出来、日米の親善関係に大きく貢献したとのことで、平成19（2007）年に外務大臣賞を受賞しており、それら全ての貢献活動が評価され、この度の旭日中綬章へとつながりました。

高瀬武三師ご夫妻表敬訪問

『和文仏教聖典』刊行にあたりご尽力いただいた高瀬武三先生ご夫妻が平成25（2013）年1月、BDKハワイ事務局を訪問されました。高瀬先生からは来年50周年を迎える仏教伝道協会の長い歴史について、また編纂当時の沖町なお話を伺いました。現在ではKindle（キンドル）版電子書籍でもおなじみになりつつある「仏教聖典」の発展は、高瀬先生の元気の源だそうです。

BDKハワイ〝説法体験講座〟開催

BDKハワイでは平成24（2013）年8月5日、12日、19日の3日間、3週間にわたり初めての試みである、宗派を問わない、現地開教師たちに向けた無料の〝説法体験講座〟を開講しました。当然誰しも、ビデオ撮影された自分がスピーチする姿を観たり、それらをお互いに批評しあったりすることには慣れていませんが、自らの説法を見つめ直す良い機会になるということで、5名限定での開催となりました。参加者はヒロコ・マエダ氏（浄土真宗東本願寺派）、マコト・ホンダ氏（浄土真宗東本願寺派）、アール・イケダ氏（浄土真宗本願寺派）、デイビッド・ナカモト氏（浄土真宗本願寺派）、コウジ・エザキ氏（浄土宗）です。

まず、それぞれが、短い法話をして、それらを全て録画し、録画された映像を全員で鑑賞、長所と短所を出し合います。はじめは、話すスピードや身振り手振り、目線のやり方など、どのように話すかのみを意識しますが、回を重ねる毎に、段々と何を言いたいのかに視点が向いてきます。それぞれが違ったスタイルで法話をし、それぞれの改善点をもって、どんどん自信が増していきます。

映像を通して自らの説法を確認し合う参加者

参加者は、毎回緊張の面持ちで準備に励んでいる様子でしたが、BDKハワイからは無料で昼食も振る舞われ、段々と参加者同士で打ち解けた雰囲気となるにつれ、みなリラックスして笑みもこぼれるようになりました。互いの改善点を積極的に議論することによって、より良い話し手になることを意識出来るようになり、また他宗派の開教師たちと交流することの出来る貴重な機会ともなったと、みな満足な様子で、修了時には6ヶ月後の再会を約束しました。

今回は5名限定での開講でしたが、他多数の参加希望者がいることもあり、現在、オアフ島だけではなくハワイの他の島々での開催も検討しているところです。BDKハワイでは、その他にもカウンセリングや仏教音楽の体験講座も企画中です。

※その他ハワイ仏教伝道協会の活動に関する詳細は直接現地へお問い合わせ下さい。

惠光幼稚園　園児たちによる踊りの披露

館内における生け花展

「和同響」による和太鼓演奏

庭園祭

平成25（２０１３）年7月13日にドイツ「惠光」日本文化センターの夏の恒例行事となった庭園祭が開催され、８００名を超える方がたが集まりました。

沼田智秀会長（仏教伝道協会）の挨拶に続き、本堂正面に設営した舞台で、和太鼓の演奏が行われました。演奏を行ったのは「和同響」と呼ばれるドイツ人のグループで、ドイツ国内の様々な都市で活動しており、大変な人気を博しています。毎年、太鼓の音を聞いて祭りの存在を知り、惠光センターに集まって来られる近隣の方がたも非常に多いようです。

和太鼓の後は、日本舞踊が披露され、花柳智絹氏（花柳流師範）とその生徒たちによる舞は多くの人びとを魅了していました。演目の途中で花柳先生の呼びかけにより、観客がステージにあがっての盆踊りが行われ、日本人、ドイツ人問わずステージで輪を作って踊る様子は、まさに日本の夏祭りを思わせる光景でした。

太鼓・日本舞踊以外にも惠光幼稚園児による遊戯、琴の演奏、忍術披露など様々な催しが行われ、３時間を超える長丁場にも関わらず、多くの観客が最後までイベントを楽しんでいました。

また、催しは屋外だけでなく館内

ヨーロッパ仏教伝道協会

でも行われ、日本家屋では倉本宗信氏（裏千家ドイツ駐在講師）によるお茶会、地下のホワイエ・セミナールームでは渡邊絹代氏（池坊総華督）と生花コースの生徒達による展覧会が開かれました。庭園祭当日は、近所のライン川河畔にはキルメスと呼ばれる移動遊園地も登場し、近隣一帯が大変多くの人びとで賑わいました。

現在、恵光センターを有するデュッセルドルフ市には多くの日本人が居住し、毎年5月にはJapan Tag（日本デー）と呼ばれるヨーロッパ最大規模の日本文化イベントが開催されるなど日本と大変繋がりの深い都市になっています。恵光センターの存在によって、同市在住の日本人は、遠く離れた外国にありながら日本文化と親しみ深い行事に参加することができ、又それを通してドイツ人との交流を深めることができます。また、地元で育ったドイツの人びとにとっては、日本固有の行事・文化などを理解する機会となっています。ドイツ「恵光」日本文化センターは、今後もこのような行事を通して、ドイツをはじめとしたヨーロッパ諸国と日本の架け橋となるべく活動を展開していきます。

ハンブルク大学沼田仏教センタープレート

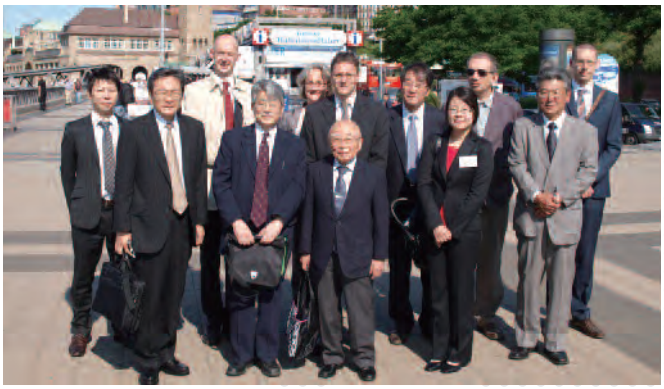
ハンブルク大学沼田仏教センター

平成25（2013）年7月11日、ハンブルク大学にて「沼田仏教センター」開設式典が執り行われ、センター開設にあたり支援いただいた仏教伝道協会より沼田会長をはじめとし多数が参席しました。

記念式典は、会場いっぱいに詰め掛けた市民を前にフルートとチェンバロの演奏で始まり、桂教授（龍谷大学）、シュミットハウゼン教授（ハンブルク大学）を皮切りに各研究者によって〝世界における仏教研究の現状について〟の講演が行われました。

それらに続き沼田会長から以下のような挨拶があり、「仏教伝道協会は、沼田仏教講座、BDK留学生奨学金制度、その他様々な仏教学術支援を続けています。多くの優れた学者・研究者が、現代の仏教学術界を背負う人材として様々な方面で活躍されていることを大変誇りに思っております。又この度は、ハンブルク大学を中心としてドイツを始め、欧州全体における仏教学研究をより大きく発展させたいという、レンツェン学長をはじめツィンマーマン教授の熱い思いで、沼田仏教学センターが開設されましたことは、本当に喜ばしいことであります。このセンターが大きく発展し、欧州における仏教学術の興隆に大きく貢献できるよう我々、仏教伝道協会も出来る限りの支援をしたく思います。」最後に「ハンブルク大学沼田仏教センター」のプレート除幕式が行われました。

「沼田仏教センター」開設式典


ハンブルク大学関係者と沼田会長

ハンブルク大学にて一行はレンツェン学長を表敬訪問、同大学における研究と教育の理念について話を伺い「沼田仏教センター」の意義をあらためて確認する機会となりました。

その後、アジア・アフリカ学研究室では担当教授陣を訪問、司書の方より日本学関係の図書を中心にご案内いただきました。ドイツ国内で最も歴史のある日本学研究室には、多数の貴重な文献が揃っており、これらの資料を駆使して、博士、修士課程の学生たちが研究に励んでいます。その後クヴェンツァー教授（ハンブルク大学）の授業を見学、てきぱきと展開される日本仏教史の内容や学生たちの反応が非常に印象的でした。

感謝

私たちは、身近な人に不足や不平は言いますが、
「ありがとう」と心から感謝することができません。

身近な人の有り難さがなかなか受け取れないから
「ありがとう」と頭が下がらないのです。

もっと言いますと、
身近な人に対する甘えというか要望が強すぎて、
何をしてもらっても「当たり前」「当然」と受け流し、
それを文字通り「有ること難い」ことと受取る心を失っているから、
何をしてもらっても感謝ということにならないのです。

自分の在り方が少しでも見えたら、
私のような自分勝手な人間の為に、
身近な人はようこそようこそ、
何かにつけて気にかけてくださると、
感謝の念も自然に出てくるのですが、
自分をよほど立派な人間と思い上がっているから、
何をしてもらっても「ありがとう」と頭が下がらないのです。

感謝は、自分を知った人の言葉であり行動です。
自分を知ることが一大事です。

（仏教伝道協会 会長 沼田智秀 著『ささえあって』―百八つのおもい―より）